人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。
マタイによる福音書　7章12節

BAIKA 1878

2019年
創立141年

2019年（平成31年）
3月15日
第15号

梅花女子大学 チャペル・ニュース Chapel News

発　行
梅花女子大学宗教部
〒567－8578
茨木市宿久庄2－19－5
072－643－6221㈹
072－643－8997
E-mail skb@baika.ac.jp
澤山記念館１階

「夢に向かって努力しよう!!」

本学名誉教授
本学チアリーディング部顧問　三浦 恵子

皆さんこんにちは！　私はこの3月で梅花の教職員として50年を越えました。人生100年時代にその半分を梅花で過ごせたことにとても感謝しています。そして、梅花で「夢」をかなえることができました。小学校6年生の卒業文集に将来は「オリンピックの選手か体育の教員になりたい」と書いていました。オリンピック選手にはなれませんでしたが梅花で体育教員になることが出来ました。皆さんも色々な「夢」があると思います。今日は私が梅花で学んだことをスポーツと絡めてお話ししたいと思います。今年1月初めにレスリングの吉田沙保里さんが引退しました。36歳にして33年間アスリート生活をしてこられました。物心ついたころから父親がレスリング指導者でその背中を見て育ち何の疑問もなく出来たという「環境」だったと思います。私が小学生の時にオリンピック選手になりたいという「夢」を持ったのは、やはり環境の影響がありました。叔母は私の母の妹で、日本人で初めて冬季オリンピックに出場した稲田悦子でした。叔母も梅花の卒業生です。

全日本フィギュアースケートで優勝した稲田悦子
Miss Etsuko Inada, champion of the All Japan Figure Skating Contest, 1939
梅花学園資料室所蔵

第4回冬季オリンピックはドイツのガルミッシュパルテンキルヘン（1936年）で行われ、出場選手25人中10位という結果でした。当時ドイツのヒットラーは「あの小さな女の子は何をしに来たのか？」と側近に聞かれ叔母と握手したとのことで日本人の女性でヒットラーと握手した最初の人として新聞に掲載されました。当時身長128㎝、12歳でした。この12歳は年齢制限が設けられてから誰にも破られていません。浅田真央選手もこの年齢制限のため14歳の時はオリンピックに出場できませんでした。私の祖母は明治の生まれですが、自分の3人の娘たちに常に「これからの女性は何か仕事を持つべきだ」と、母は薬剤師・二番目は洋裁学校の校長先生・三番目にフィギュアスケートをさせて、当時としては画期的な祖母でした。叔母の関係で私も幼稚園の頃からスケートを始めることになり、小学生の時は朝学校に行く前に朝日アリーナ（現在のフェスティバルホール）リンクで練習して、学校に行き、帰りはまたリンクで練習というアスリートとして競技していました。関西ジュニア大会等で結果を出しても、あまり練習しなくても稲田先生の姪御さんだから点数が出るのね!!　と小学4年生頃から言われました。

サラリーマン家庭のため練習にはいつも一人でリンクに通っていました。他のスケーターはほとんど親が毎日ついてきていました。練習中に「恵子ちゃんお茶飲みに行きましょう」と誘われると、さっさと靴を脱ぎ、練習しないで喫茶室で「フルーツポンチ」を食べるのが常になっている時期がありました。その後大会があり審判が見て結果が出る表現ス

ポーツのため、点数が私に高く出ると噂がますます広まり、当時東京で指導をしていた叔母から、「そんなに練習しないならやめなさい」と言われました。小学生の私の気持ちの中には「勝利しているのにこのままでもいいのではないか」という気持ちと親や、叔母の言うことも一理あると思い、大阪市内から豊中に引っ越す機会に小学校6年生でスケートをやめて、「オリンピック選手の夢」はやぶれました。その時一点でも一秒でも勝ちは勝ち、負けは負けのスポーツをしようと切り替えました。

中学(豊中二中)に入学後せっかく新しいクラブにチャレンジするなら強いチームに入りたいと、当時強かったバスケットボール部に入りました。体育館はなく土のコートで、今では考えられないことですが、水は飲んではいけない、失敗すると「うさぎ跳び」という環境の中で練習して大会で結果が出て優勝する喜びと、個人競技と団体競技の違いを知り苦しい練習にも耐えることができました。梅花高校に進み3年間、中学から6年間バスケットボールをしました。梅花高校2年生の時、大阪大会で初めて優勝しました。その後高校の優勝のニュースは聞いていません。その頃から体育教員になりたいと決めて日本体育大学を受験しました。4年制の体育大学への受験は梅花では私が初めてでした。そして卒業したら必ず梅花に帰ってきなさい。就職付きで4年間東京に行きました。体育教員になるにはスケートとバスケットボールだけでは不安もあり、徒手体操部に入りました。このクラブは試合とか競技ではなくマスゲームや集団行動等身体の基本を学ぶクラブでした。最近この集団行動はテレビでよく放映されている日体大集団行動です。1964年(昭和39年)に入学した年に東京オリンピックがあり、1年生の時はその期間オリンピック休暇があり私は駒沢競技場でグランドホッケーの手伝いをしました。来年2020年に東京で開催されるオリンピックは前回とどう違うのかとても楽しみです。2020年の開会式でチアリーディングの演技が取り入れられたら最高にうれしいなと思っています。

卒業後梅花の短期大学に体育教員として教員スタートしました。(1968年、昭和43年)そこから9年後(1977年)梅花女子大学に移りました。1992年からチアリーディングに携わることになりました。最初大学の後輩から箕面自由学園でチアリーディング部を作ったが大学に作ってとほしいとのことで、第一回の関西大会を見に行きました。そこに梅花女子大学の3年生がクラブチームで出場していて「先生どうしてここに来たのですか」と言われクラブを立ち上げようかな？と思っていることを伝えました。学校でクラブになるならぜひさせてくださいと言ってくれました。もう一人アメリカンフットボールが大好きなゴルフ部の学生がチアリーディングの話をしたら、ゴルフ部を辞めてチアリーディングします。と二人の核になる学生からはじまりました。一人は技術や練習方法を教え、もう一人はチアリーディングの歴史やチアリーダーのマナーを勉強してチーム名もゼミの先生にお願いして梅花と姉妹校であるマウントユニオン大学に連絡を取り同じ名前のレイダースとし、チーム名とチームカラーを同じにして始まりましたが、当時はパソコンも無く全て連絡は手紙でした。そこで学生たちの意欲、集中力の素晴らしさを見て私自身のめりこみました。競技もありますが、応援する感動を与える等素晴らしいスポーツだと考えています。フィギュアスケートと同じ表現スポーツでしたので私は審判員にだけはならないでおこうと思い、大学時代の徒手体操部で学んだことを学生と共に練習することと、学校と学生の橋渡しをしようと始めました。創部から27年が過ぎました。最初は部員集めに苦労しましたが、徐々に人数が増え、今では全国から来てくれるようになりました。大学にチアリーディング部が出来て、幼稚園、キッズ、中学・高校と梅花の柱になれたことを誇りに思っています。

何でも結果を出すためには苦しいこと、悲しいこと、悔しいこと多々ありますが、それを乗り越えた時の感動は結果を出した者しか味わえないものがあります。私自身こんなに長く梅花にかかわれるのも学生たちと学校のおかげです。小学校文集の「夢」をかなえられたのは、常にスポーツに興味を持ちどうしたら？という疑問を改善することにより今日まで頑張れたと思っています。「夢」はさめれば跡形もなく消え去ってしまいます。「夢に向かって進め」とか「私に夢がある」というのは理想や希望に向かう姿です。それは努力なくして達成できないと考えます。皆さんも自分の目標「夢」を実現する気持ちをもって大学時代を過ごしてほしいと思います。

本日の聖句「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。」新約聖書マタイによる福音書7章12節のこの言葉は本当に意味深い考えさせられることばです。

〈梅花女子大学クリスマス礼拝〉

「クリスマスは希望のシンボル」

日本基督教団天満教会 牧師　春名 康範

旧約聖書イザヤ書7章3～14節
新約聖書ルカによる福音書
1節　26～38節

「18歳と81歳の違い」という作者不明の文章が、あります。

恋に溺れるのが18歳、風呂でおぼれるのが81歳
道路を暴走するのが18歳、道路を逆走するのが81歳
心がもろいのが18歳、骨がもろいのが81歳
偏差値を気にするのが18歳、血圧・血糖値が気になるのが81歳
まだ何も知らないのが18歳、もう何も覚えていないのが81歳
東京オリンピックに出たいと思うのが18歳、東京オリンピックまで生きていたいと思うのが81歳
自分を探しているのが18歳、皆が自分を探しているのが81歳
家に帰らないのが18歳、家に帰れないのが81歳

若い人も大変ですが、年よりも大変です。しかし、クリスマスはこの大変な事態に置かれている人々が神様に用いられた出来事を伝えています。皆さんは新約聖書の中に2つのクリスマス物語があることをご存知だと思います。一つはマタイによる福音書1～2章、もう一つはルカによる福音書1～2章です。同じクリスマスの出来事を伝えているのに2つの記事は全く違っています。同じ事件を伝える新聞記事が新聞社によって全く違う出来事のように書かれているのと同じ疑問を感じます。しかし、2つの福音書の記事は異なった出来事のように書きながら同じことを伝えているのです。

マタイによる福音書は、新約聖書の一番初めに置かれています。聖書を読んでみようと思って開いた人を失望させ、読むのを諦めて閉じさせてしまう無味乾燥な系図が初めに書かれています。ところが、この福音書はユダヤ人の大好きな旧約聖書の伝統に従って、物事の始まりを記す仕来りに従って系図を書いていますが、ユダヤの伝統の男性中心の系図の中に女性を5人も入れて、しかもユダヤ人が排除している外国人女性や罪を犯した女性たちがキリストの誕生に繋がる大事な系図に出てきます。これは、男尊女卑のユダヤ社会に神様はあなたがたが軽んじている女性たちを用いて神の国をもたらし、新しい社会を作ろうとしておられるのだと記者マタイは宣言しているのです。

ルカによる福音書は、歳をとったザカリアとエリサベト夫婦に子供が与えられるという話から始めて、マリアという若い娘が神様の子供を宿したという、今朝拝読した物語を記しています。この福音書はローマの高官のために書かれたことが最初に記されています。ローマは軍事力こそ支配の力で、財力や若さこそ新しい時代を築く力だと信じられていた社会でした。そのローマの支配者の一人に、そうではなく神様は高齢者や未成年を用いて神の国を築かれるということを言いたくてクリスマス物語を書いています。聖書に採用されなかったヤコブによる福音書によるとマリアはこの時14歳であったと記しています。全然違う話のように見えながら、神様はこの世の世界で人々が価値あるものと考えていることと逆の者を用いて人々に救いをもたらし、新しい時代を築こうと働きかけておられると記しているのです。

クリスマスの出来事で活躍したのは老人と未成年でした。まだ自立できていない娘と、自立したいと思っても足腰が不自由になって自立できない老人がクリスマスの出来事の主人公なのです。私たちは人間的な能力の高い人が新しい時代を築いたり、困っている人を助けたりする良い働きをすることが出来ると考えていますが、そうではなく人間的に見たら能力の乏しい人、不可能と思われている人を神様は用いて驚くべきことをなさると宣言しているのがクリスマスの物語です。

私は、子どもの時は学習難民でした。音楽の時間に先生が「ヘ調だとファがドになる」と言われました。どういうことだろうかと関心を抱いて質問していたら竹竿で頭を叩かれました。以後、どうしてファがドになるのかと考えていたら成績が2になりました。英語の時間に「信じるはbelieveだ」と言われました。「どうして英語では信じるがbelieveなのですか」と質問したら、「覚えておけばいいんだ」と叱られました。昔、葉っぱが揺れているのを見て、目に見えない力が働いていると思っ

たんだ。それでleafの複数形leavesからbe-leavesが生まれ、believeという動詞が生まれたのさ」と説明されていたら、私は英語が大好きになっていたと思います。国語の時間に罪という字が人間の「間」という字を半分に引き裂いて、背中合わせにしたら罪という字に見えるだろ、「罪とは背を向けあっていることだ」と教えられていたら国語が大好きになっていたと思います。学校では「覚えておけばいいんだ」ばかりでしたから、勉強はつまらないと思い授業中に漫画ばかり画いていると成績はどんどん悪くなりました。そんな自分を先生は叱り、親は嘆いていました。

しかし、「躓いている人の理解者として共に生きる牧師になろう」と考えた時に面白くない勉強にも取り組む気力が湧いて来ました。こうして漫画牧師が誕生しました。私は、学習難民でしたからどんな人にも素晴らしい学習能力が潜んでいると理解が出来、すべての人に希望を見いだすことが出来ました。

10月13日に中南米のホンジュラスを出発した160人の移民キャラバンが、仕事を求めてアメリカに向かって歩き始め一万人に増えてメキシコを歩いています。11月14日にティファナに2300人が到着して、アメリカの警備隊とにらみ合い始め、今も難民キャンプに到着する人の数が膨れ続けています。先日、遂に難民の一人の少女が死にました。11月6日の新聞の川柳に「アメリカに希望をつなぐ痛ましさ」という埼玉県の方の投稿が載っていました。

難民を排除すべきではありません。神様が難民と共におられて、新しい時代と世界を産みだそうと働きかけておられるからです。私たちは、自分は無力だと感じる時、自分は何もできないと考えるべきではありません。神様は自分や人々が「無力だ」と決めつけている人々を用いて、歴史を変えて行く驚くべき出来事を起こそうと働きかけておられるのです。ですから、自分が考えているようなことはつまらないことだと思わないで、気が付いたこと、関心のあることをどんどん実行に移してみましょう。神様は、私たちをザカリアやエリサベトやマリアにして今の時代でもこの世界を救う為に、人々に希望の光を届けるために、新しいことを始めようとしておられるからです。

イラスト：春名康範

「澤山保羅先生の生涯」

本学名誉教授　茂　義樹

◆キリスト教主義学校

わが国では多くのキリスト教主義学校をミッション・スクールということがあります。それはキリスト教主義学校が外国のミッション（伝道団体）から派遣された宣教師によって創設、運営され、その費用も本国の教会から送られて来たからです。例外的に日本人の力と費用で建てられ、運営された学校がありますが、歴史の波の中で消えてしまったのがほとんどです。梅花学園はその例外の一つでミッションに依らないで自給、独立で運営された学校です。それには創立者澤山保羅の信念が込められているのです。

澤山保羅先生
梅花学園資料室所蔵

◆誕　生

梅花学園創立者、澤山保羅先生（以下、澤山と略記）は長州藩吉敷（よしき）（現、山口県山口市吉敷）で、1852（嘉永5）年5月10日（陽暦）に誕生しました。幼名は馬之進でした。1858（安政5）年6歳からは吉敷憲章館（けんしょうかん）で学びました。その年幕府は日本を開国し、翌年には安政の大獄が起こり、吉田松陰が刑死、さらに幕府が攘夷を主張する長州に兵を送るといった激動の時代でした。

◆四境戦争

長州を征伐しようとして幕府軍が攻めてきた1866（慶応2）年、14歳の澤山は長州軍の鼓手として出陣しました。長州軍は幕府軍を撃退し、幕府が崩壊するきっかけになりましたが、その結果成立した明治政府は廃藩置県を行い、武士は職を失い新たに生きる道を探らねばなりませんでした。

◆神　戸

18歳になった澤山は1869（明治2）年故郷を離れ、兵庫に同郷の先輩内海忠勝（うつみただかつ）を訪ねました。内海は

近代的な学問を学ぶことを勧め、神戸にいたアメリカン・ボード宣教師D・C・グリーンを紹介しました。明治政府がまだキリスト教禁制の高札を掲げている時、澤山はグリーンの自宅で英語と共に聖書も学びました。

◆留学、受洗

1871(明治4)年グリーンの日本語教師がキリシタン禁制令によって逮捕されたことを機に、彼は横浜に向かいました。翌年1872(明治5)年20歳の時に渡米し、グリーンの身内が住むイリノイ州シカゴの北、エバンストンのノース・ウエスタン大学予科に入学しました。しかし病気がちで勉学が進まぬ中、同年11月エバンストン第一組合教会で受洗しキリスト者となりました。日本ではまだキリスト教が禁じられていた(1873(明治6)年まで)時でした。

◆伝道者

1875(明治8)年一時帰米中の宣教師H・H・レビットがエバンストンに澤山を訪ね、キリスト教伝道者として帰国するように勧めました。それまで日本の近代化に貢献する仕事につくことを考えていた澤山に、初めてキリスト教の伝道者としての帰国する道が示されました。

◆浪花教会創立

24歳になった澤山は1876(明治9)年帰国します。内海忠勝はさっそく政府で働くように要請しましたが、彼は自分の使命は日本伝道にあると考えては申し出を断り、レビットのいる大阪に来ました。早速彼は宣教医アダムスが高麗橋で運営する診療所で、通訳として働きながら伝道を始め、1877(明治10)年浪花教会(最初は公会と言った)を12名の会員で設立し、日本人最初の牧師となりました。また同教会は宣教師の援助を受けないで日本人の手で運営される日本初の自給独立教会でもありました。

◆梅花女学校設立

浪花教会は先にあった梅本町教会(1874年創立。現、大阪教会)と毎月親睦会を行っていましたが、その席上女学校設立が提案され、準備の後1878(明治11)年1月7日土佐堀裏町10番地の借家(現肥後橋交差点西側南、ホテル所在地)で、両教会の名をとった梅花女学校を自給で開校しました。最初の生徒は15名で、吉敷から来た成瀬仁蔵(後に日本女子大学校を創立)、宣教師スティーブンスらが教師でした。澤山が校長に就任することは、牧師であることを理由に知事が認めず、大阪英語学校教師の小泉敦が校主(校長)となり、彼は妻善と共に女学校に住み込んで生徒の指導にあたりました。この年26歳の澤山は神戸女学院最初の生徒だった姫路出身の田島多可と結婚し(上記小泉善は姉で同窓)、長女伊佐、次女知可(すぐに死去)が生まれました。しかし多可は結核のため1883(明治16)年22歳で世を去りました。

◆伝道会社設立

同年澤山は新島襄らと共に日本基督伝道会社(後に日本組合基督教会となる)を設立し、各地に伝道者を派遣しました。翌年には天満教会を創立し仮牧師を勤め、さらに岸和田、大和郡山、三田等にも伝道しました。

◆女学校校長

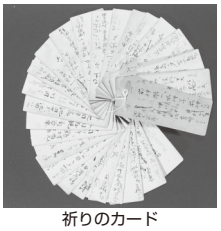
梅花女学校は1879(明治12)年創立の地に校舎を新築し、大阪、浪花、天満の3教会が運営する教会立の女学校となり、1883年以降は澤山(31歳)が校長に就任し、学校を軌道にのせました。

◆病　床

澤山は自ら結核のため床に就きながらも、浪花教会に起こったリバイバル(一時に多数の人が回心して入信すること)を指導し、静養のために新潟に行っても(1884年32歳)伝道にあたりました。しかし帰阪後は病に伏し、1887(明治20)年3月27日34歳で逝去しました。葬儀は彼が創設に関わったYMCAで行われました。

◆教会自給論

1883年には『日本教会費自給論』を発表、世界の伝道地の教会で初めて自給伝道(援助を受けないで自分の集めた費用での伝道)を主張しました。また『預言問答』『真理之証』(死後出版)の著作を残しました。浪花教会には愛唱聖句のマタイによる福音書7章12節の額と、死の床で会員のために祈った「祈りのカード」が残されています。



祈りのカード
梅花学園資料室所蔵

◆信仰の人

澤山はイエス・キリストのように清貧に生き、神と人に仕えました。特に援助を受けず、苦しくても自分たちで教会、学校を運営するという考え方は画期的なもので、その後長老派の韓国伝道はじめ世界各地の伝道に応用されました。梅花は数少ない自給のキリスト教主義学校であることを誇りにして、苦しくても着実な歩みを切り開きましょう。(詳しくは、笠井秋生、佐野安仁、茂義樹著、『沢山保羅』、日本基督教団出版局、1977年を参照して下さい。また梅花学園澤山保羅研究会編、『澤山保羅全集』、教文館、2001年も参照。)

「弱さの中でこそ」

日本基督教団神戸多聞教会 牧師　近藤　誠

私は毎週水曜日、豊中にある梅花高校に通っています。聖書科非常勤講師として高校1年生に教えているのです。このチャペルに集まってくださった皆さんの中にも、きっと梅花高校出身の方もおられることでしょう。その方々は自分の高校時代を振り返って、なかなか元気の良い女子高生たちに、なかなか手を焼いている私の姿を想像できるかもしれませんね。もちろん、真面目に、静かに授業に取り組んでいましたよ、という方もおられるでしょう。今のところ何とか心折れずに過ごしています。ちょうど明後日の水曜日が二学期最後の授業で、次の週は学期末テストが行われます。

これからそのテストを準備しますが、今学期は主に、梅花学園を創立された澤山保羅先生のことを授業で取りあげました。澤山先生の人生はほんの34年にも関わらず、非常にドラマチックなものです。生徒たちには少しでも関心を持ってもらいたくて割と一生懸命話したのですが、どれくらい伝わったのかはテストの結果で判明します。皆さんは学生の立場ですから、これからも試験と向き合っていかなくてはなりませんが、同時に教師の側でもその教え方が採点されているのです。

そして今日、皆さんにお話しさせていただきたいのは、その澤山保羅先生のことです。皆さんもすでに高校、あるいは大学の講義の中で学ばれたかもしれませんが、この際少し思い出していただくか、新しく覚えていただきたいのと、ぜひ先生の生き方から皆さんそれぞれの今後の人生のヒントにしていただければと願っているのです。梅花学園を創立した偉い先生という表面的な部分ではなく、むしろその内面にあるもの、先生を支え導くことになった信仰というものに焦点を当ててみたいと思います。

まず皆さんに覚えておいていただきたいことは、澤山保羅先生は学園創立者である前に、キリスト教の牧師だということです。アメリカ留学から帰国された先生は、1877年の浪花教会設立の日に、同志社創立者の新島襄先生から按手礼を受け、国内における日本人初のプロテスタント教会牧師となりました。そして翌年、自ら洗礼を授けた成瀬仁蔵先生や協力者と共に、梅花女学校を設立しました。澤山保羅先生はこの後も、各地で精力的に日本人へのキリスト教伝道に邁進されたのでした。

これだけを聞くと、明治維新初期にアメリカ留学を果たし、帰国して教会や学校を作ったという偉人伝に終わってしまいかねません。今風に言えば、勝ち組でしょうか。けれども先生はどちらかというと下級武士の家柄で、留学する金銭的余裕などそもそもありませんでした。この時代の留学といえば、政府などから奨学金をもらっての公費留学が一般的でしたから、渡米するための往きのチケット代しか無かった先生の留学時代は、いつも欠乏状態にありました。それに最初は英語にも非常に苦労されたようですし、さらに最も厄介な問題は、病弱だったことです。アメリカで二度も手術を受けられ、日々闘病しながらの歩みであり、結局34歳の若さで肺結核によりお亡くなりになっています。また、二人の娘さんがおられましたが、次女のちかさんは生後2ヶ月で亡くなられ、妻のたかさんも、あるいは澤山先生の結核が感染したからか、22歳で先立たれたのでした。

本当に神が存在するならば、どうして、神を信じ、牧師となり、教会を立て、キリスト教を基盤とした愛なる女子教育を志した澤山先生が、次々に家族を失い、ご自分も志し半ばに倒れなければならなかったのでしょうか。けれども私たちは、人の命が私たちの自由にはならないということを知っています。皆さんぐらいの年齢になりますと、自分の身近の方がお亡くなりになるという経験が増えていかれると思います。私が今住んでいる神戸では、約20年前に大きな震災がありました。2011年には東日本大震災がありましたし、ここ近年は災害が各地で次々に起こっていて、大阪でもブルーシートがかかっているところが残っています。世界に目を向ければ、まだまだ理不尽な状況に置かれている人々、ひどい場合には命をも失ってしまう人々がおられます。

私は牧師をして10年以上になりますが、少し特殊な職業ですので、人の重大な局面に立ち会うことがあります。理不尽なことが起こります。そういう時には正直な気持ちで、「神様、どうしてですか」と祈らざるを得ないことも少なくないのです。牧師としての大先輩である澤山先生は、どのような信仰をもって多くの

苦難の中を歩み通されたのだろうか、果たして神への信頼は揺らがなかったのかと聞いてみたくなります。「神など存在しない、全ては自然現象であり、そういう星の下に生まれたのだ、運命なのだ、仕方ないのだ」というように、刹那的に生きる方が悩まなくて済むのでしょうか。皆さんの中にも、そういう生き方を好んで選んでおられるか、あるいは選ばざるを得なくなったという方もおられるかもしれません。

しかし、澤山先生がある方に向けて書かれた手紙の中に、私たちの命、そして存在に、積極的な意味をもたらす聖書の言葉が引用されているのを見て、私は非常に励まされるのです。それはローマの信徒への手紙8章28節です。「神を愛する者たち、つまり、御計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共に働くということを、わたしたちは知っています」。「万事が益」というのは、私たちの目には良いこと、あるいは悪いように見えることも全て、神の計画、御心のうちにあるのだということです。

さらにもう一つの手紙に、澤山先生の揺るぎない信仰の強さが表れているのでこれも紹介したいと思います。本当は古い日本語で書かれているのですが、私訳しておきました。「私には二人の娘がおりますが、一人は去年亡くなってしまいました。私は人生のいろいろな境遇に接し、つぶさに辛酸を舐めてきました。牧師となり、夫となり、父となり、しかしさらに、父と妹、子供と母を失いました。しかしながら、これらすべての生涯の喜びと憂いは、私をますます、『昨日も今日も永久に変わることのない』(ヘブライ人の手紙13章8節)主に近づけています。感謝のほか、ありません」。

私も一人の牧師として、一人の人間として、澤山先生の遺された言葉に感銘を受けました。多くの試練を受けながらも、その度に先生は、すべてを救い、愛の力を与えてくださる主イエス・キリストによって慰められ、励まされて最後まで生き抜かれたのでした。この澤山先生にも、ご自分を奮い立たせた先輩牧師がいます。それは新約聖書に登場する使徒パウロです。

今日読んでいただいたコリントの信徒への手紙には、パウロ自身の信仰告白が記されていました。パウロもまた、体に治ることのない何らかの病をもっていたのではないかと言われています。何とか癒していただきたいと三度も主に願っていますが、その祈りは彼が死ぬまで聞かれることは無かったようです。彼もまた、投獄されたり鞭打たれたり、殺されそうになるという苦難の歩みを続けたのです。けれどもそのような状況の中で、「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ」という真理に達したのです。

皆さんはまだまだ、人生の中で最も力に溢れ、やろうと思えば何でもできる境遇におられると思います。ただ覚えておいていただきたいことは、人生はいつも勝ちっ放しだったり、上り調子が続くとは限らないということです。それよりもむしろ、私たちは自分の命の長さに関わらず、自分の健康状態や経済状況に関わらず、今自分のできる精一杯の方法で、隣人や社会の中で、愛を土台とした行いを実践していくことに、神の御心があるのではないでしょうか。

皆さんが学ばれている梅花学園は、これからの時代を担われる皆さんが素晴らしい人間形成をなされることを目指して、澤山先生や地域の教会が力を合わせて設立されたのです。どうぞ、ほんの少しでもその祈りと願いを受け止めつつ、この学校での豊かな学びを続けてくださるならば、地域の牧師としてこれほど嬉しいことはありません。

「相手の気持ちを理解する」

本学管理栄養学科 教授　藤田 修三

本日は、考えた話題だけを話すつもりでしたが、先々週、梅花女学校に関係する興味ある資料を見つけましたので、それを含めて話をしたいと思います。

先ずは、梅花女学校の資料の話しです。結論から申しますと、明治の初期、新渡戸稲造が、梅花女学校の卒業式で祝辞を述べたその資料が残っているということです。「新渡戸稲造」という人物をご存知ですか？一つ前の五千円札に登場した人物です。10数年前に新札に変わったので、皆さんであれば、小学生低学年頃、お年玉でお目にかかっているのはないですか？　新渡戸稲造ですが、明治時代初期に生きた人物で、

岩手県出身の農学者であり教育者である方です。キリスト教信者であり、東京女子大学の初代学長です。その新渡戸さんが、今から110年前、「梅花女学校」卒業式に参列し、祝辞を述べられたタイトルは、「女子教育について」です。「女学校、今でいえば大学で学ぶ意味」を卒業生へ伝えるメッセージです。皆さんの資格、看護師、歯科衛生士、管理栄養士は、大学で学び国試を受験すれば取得できますが、これらは専門学校を卒業しても取得できます。では大学と専門学校での学びに違いがあるの？

祝辞のポイントを紹介しますと、前文「新渡戸稲造氏が梅花女学校卒業式において演説せられし大要なり」百姓にとって花より実が大切であり、自分もかつてはそう思っていたが、教育においては間違っている。教育においては、実用はむしろ棄てて、むしろ理想を高くするということが大切。日本の教育は、ドイツに倣ったため、全てが規則的で、学科が多く、各分野を教えようとした。それよりは、教育はつとめて自由で、専門よりは理想の脳力を養うべき。大学を出た立派な官僚となった知人が曰く、「僕は大学で教わったことは何も役立たなかった。しかし少しばかり学んだ哲学が、僕に非常な利益を与えた。」と。

大学での学びで最も注目すべきことは、人生の理想を養うことにある。飯を炊いたり、漬物をつけるのはいつでも習える。しかし理想は大学でないと容易に得られない。そのためには、良い詩、小説、聖書などによって大いに理想を思い、また考えることである。理想とは、辞典で調べたところ「自分が思い描く、考えうる最も完全なもの」。新渡戸稲造の祝辞には、大学で学ぶ大切なことを教えている気がします。文科省は、大学では次の3つの力をつけること、としています。知識・技能、判断・表現力、向学心、人間性また向学心・人間性を「自分の人生を見つめた対応」とも表現。これは新渡戸さんが祝辞の中で使われた「理想」という言葉と同じ意図。

さて、ここからが本題です。自分の経歴ですが、約15年前に青森県立保健大学に着任し、2年前、今の梅花女子大学へ転勤してきました。青森県立保健大学は、看護学科、理学療法学科、社会福祉学科、栄養学科からなる、保健医療福祉系大学です。少し、当時のことを話します。学長は新道幸恵先生で、看護学科の教授です。今や全国に看護系大学が沢山できていますが、全国各県に公立看護大学や看護学科をつくって保健医療の地盤を固めた時代があり、その草分け的存在の先生です。自分が着任間もない頃、学長室によばれまして、「藤田先生、これ本を差し上げましょう」と、一冊の本を頂きました。それはナイチンゲールの「Notes on Nursing（1859年）日本語訳・看護覚え書き」でした。専門が食物栄養なので、「第6章食事」に目を通しました。今回、覚え書きを正確に紹介するには不正確なので、図書館から借り出しました。覚え書き第6章食事のポイントは、次のようです。食事の時間、食事の管理、病人食にしっかりした考え方をもつことを説いています。食事援助で欠けている点は、「病人食について、しっかりした観察がほとんどなされていない」（解説：患者の立場になって病状をしっかり知ること。当時のことです）食品成分表を読むことよりも、患者の気持ち、患者の胃袋の意見に注意を払うこと、を説いています。また、これが患者に食べさせるものを決める全ての人の仕事である、とも説いています。おそらく食べ物は呼吸する空気に次いで、病人に与えるべき最も大切なものであろう。これらのことが、これからの管理栄養士に求められることだ、将来栄養学科新設に向けての学長の考えと読みました。まとめますと、覚え書きから学ぶべきことは、厨房で栄養計算や調理しているのではなく、ベッドサイドへいって患者の給食を食べていること観察することが大切。その際に、患者の食事状態を観察し、患者の気持ちを聴き、食べやすいまた食欲を増進する食事に改善してあげることに努めなさい。また、その患者の立場に立って、医療に従事する姿勢は、澤山保羅のいう「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。」を実践することだと思います。覚え書きの「食事の話題」は、看護師、歯科衛生士をめざす人にも共通するアイテムであると思います。梅花女子大学には、幸せにも医療系の3学科ができました。クラブ活動、その他の学生生活を通して、相互に医療情報を交換できるような環境ができればと思いますし、また皆で作って頂きたいと思います。

本日話したふたつの話題は、大学で学ぶことは、知識や技能習得だけでなく、自分の理想を高めることだということ。看護の「看」、つまり「人をケアする」ことを、ここに集う、看護学科、口腔保健学科、管理栄養学科の3学科で共有し、コメディカルとしてのスキルアップを期待して、本日の話しを終わりたいと思います。

これから3年半、理想をめざして梅花女子大学での生活を楽しんで下さい。

「忠実な僕」

日本基督教団仁川教会 牧師　杉田 俊介

私が働いている仁川教会は神戸女学院とかかわりの深い教会です。神戸女学院は1875年に、イライザ・タルカットとジュリア・ダッドレーという、アメリカからやってきた二人の女性宣教師によって創立されました。きょうの聖書の箇所は、この神戸女学院の創立者のひとり、イライザ・タルカットと関わりの深い箇所です。タルカットは日本で女子教育やキリスト教伝道に生涯をささげ、1911年に神戸で亡くなります。そして神戸の外国人墓地に埋葬されたのですが、その彼女のお墓には、「忠実な良い僕だ。よくやった。主人と一緒に喜んでくれ」という言葉が刻まれています。「忠実な良い僕だ。よくやった。主人と一緒に喜んでくれ」。これは先ほど読んだマタイによる福音書25章の21節からとられた言葉です。きょうはこのタルカットのお墓に刻まれた言葉から、いかに与えられた命を用いるかということを考えてみたいと思います。

このタルカットのお墓に刻まれた言葉ですが、聖書の見出しにありますとおり、「タラントンのたとえ」というたとえ話の中に出てくるものです。そこでこの「タラントンのたとえ」がどんなたとえなのか、みてみたいと思います。たとえには、このようなことが記されています。ある商人が長い旅に出ることになり、財産をなんとかしなくてはいけなくなった。そこで、その人は三人の僕に財産を分けて管理させることにし、一人に五タラントン、一人に二タラントン、一人に一タラントンを預け、そして旅に出たというのです。ちなみに後でも触れますが「タラントン」というのは、新約聖書が書かれた当時用いられていた通貨の単位です。

さて、主人が旅に出た後、五タラントンを預かった人は、それを元手に商売をして、さらに五タラントンを儲けます。二タラントンを預かった人も同じように儲けます。けれども一タラントンを預かった人だけは、それを用いるのではなく、お金を土の中に埋めて隠しておいた、というのです。

それから長い時が経って、旅から主人が戻ってきます。主人は一人目の僕、二人目の僕がそれぞれ与えられたタラントンを生かしたことを大いに喜び、そして「忠実な良い僕だ。よくやった。主人と一緒に喜んでくれ」という、先ほどのタルカットのお墓に刻まれた言葉をいうわけです。そして主人は、彼らにさらに多くの財産を任せることにします。けれども、三人目の僕は、主人から怠け者と叱られてしまいます。そして、新たな財産を任されるどころか、初めに預けられた一タラントンまで取り上げられてしまうのです。

みなさん、このたとえを読んでどうお感じになりましたか。

三人目の僕が叱られるのは、ちょっとかわいそうに思えるかもしれません。というのは、彼はもっとも無難なやり方を選んでいるからです。一人目の僕、二人目の僕は主人から与えられたタラントンを使って商売をして儲けたわけですが、商売をするとなれば当然損を出す可能性があります。見方によっては主人の財産を危険にさらしているともいえる。したがって、与えられたものをそのまま土に埋めておくというのは、最も無難なやり方だったわけです。こうやって見てくると、叱られるべきは主人の財産を危険にさらした一人目、二人目の僕ではないのかという気がしたりもするわけですが、イエスはそうではない、というわけです。主人が喜ぶのは、損を出すのを避けて与えられたものを埋れさせることではなく、与えられたものを生かし、それを伸ばすことである。大切なのは、思い切って与えられたタラントンを用いることだ、そういうのです。

さて、このたとえを通して、マタイによる福音書の著者は読み手に何を伝えようとしているのでしょうか。タラントン、主人、僕というのは、それぞれ、何の比喩であるかおわかりでしょうか。

まずタラントンについていうと、これは、人に与えられた才能とか能力のことを指しています。英語に「能力」とか「才能のある人」という意味のTalentという言葉がありますが、その語源になったのがこの「タラントン」です。このたとえ話では、「タラントン」は主人から僕に預けられるものとされています。主人は神、僕はわたしたち人間のことであると理解すれば、このことの意味がはっきりします。つまりこのたとえは、人間の能力や才能は、神からわたしたちに預けられたものである、神によって与えられたものであると

いう理解にたっているのです。ここにいる方の多くはキリスト教徒ではないと思いますが、人の能力は自分の思いを超えた仕方で与えられるものである、という感覚はわかるのではないかと思います。

そして、人間の能力や才能は預けられたもの、与えられたものであるというものの見方は、人間には、預けられた能力を、それを与えた神に喜ばれるように伸ばし、用いていく責任があるという考え方につながっていきます。わたしたちの能力、才能というのは、自分自身のためにあるのではない。一人目の僕、二人目の僕が与えられたタラントンを生かして主人に喜ばれたように、わたしたちも与えられた能力、才能を、それを与えた神に喜ばれる仕方で伸ばし、用いる務めがある。そういう考え方に、才能や能力は与えられたものであるというものの見方は、つながっていくわけです。

では、与えられたものを神に喜ばれるように用いるというのはどういうことでしょうか。イエスの死後にキリスト教に加わったパウロという人がいますけれども、彼はある手紙の中で、いかに優れた能力を神から与えられていたとしても、そこに愛がなければ何の意味もない、と記しています。いいかえれば、与えられた才能や能力というものは、となりびとのために用いてこそ、はじめて意味があるということです。いかに多くのものを与えられ、またそれを育てたとしても、それを自分自身の利益のためだけに用いるのでは何にもならない。与えられたタラントンを、他者のために、となりびとのために用いる。それが与えられたものを神に喜ばれるように用いるということなのです。預けられ、授けられたものを見つけ、育て、そしてそれをとなりびとのために用いること。このたとえ話は、そのことの大切さをわたしたちに訴えかけているのです。

女学院の創立者のタルカットのお墓に21節の「忠実な良い僕だ。よくやった。主人と一緒に喜んでくれ」という言葉が刻まれているのは、彼女がまさにそのような仕方で、与えられたタラントンを用いた人だったということを、表しているわけです。タルカットは1875年に女学院を創立させた後、5年ほどで女学院を離れますが、その後も日本の各地で孤児や病人といった、弱い立場にある人や、困難の中にある人々のために与えられた命を用いて、やがて「日本のナイチンゲール」とまで呼ばれ、最後は日本に骨を埋めます。与えられたタラントンを日本のとなりびとのために生かし切ったのであり、だから彼女のお墓には、このマタイによる福音書25章21節の言葉が刻まれているのです。

それでは、みなさん、自分に与えられたタラントン、能力、才能はなんだと思いますか。ちょっと考えてみてください。

すぐに答えられる人、強いていえばこれかなあくらいの人、答えにつまってしまう人、いろいろだと思います。語学、学問、ITの方面かな、という人。教えるのが得意だ、という人。あるいは、人を惹きつけ引っ張る力がある、という人。だれかの話を聞いたり、サポートしたりとか、真面目に裏方を務めるとか、縁の下の力持ち的なタラントンを与えられている人。すでにそのようなタラントンを見つけ、それを伸ばし、用いるために励んでいるという人もいるでしょう。

一方で、何も自分のタラントンが思い浮かばない人、あるいは何か思い浮かんでもそれが他の人に比べて少ない、周りの人たちと比べて自分にはより少ないタラントンしか与えられていないと感じる人もいるかもしれません。わたし自身も、そう感じることはよくあります。

たとえの中に、一タラントンを預けられた人が出てきますが、この人の姿には自分に与えられたものが少ないと感じている人が陥りやすい傾向が描かれているように思えます。この僕は預けられた一タラントンを用いずに隠してしまいます。想像ですけれども、この僕はもしかしたら他の二人と比較して、自分には少ししか与えられていないと劣等感を持ち、金を隠しておくという無難なやり方を選んだのかもしれないなと思ったりします。

けれども、実は一タラントンというのはかなりの大金で、当時の労働者の賃金の15年分以上にあたります。今の日本でいえば数千万円相当です。このことが意味しているのは、たとえ人に比べて少なく見えたとしても、わたしたちには必ず他者のために用いられるタラントンが与えられているということ、それも豊かに与えられているということです。

いま何も自分のタラントンが思い浮かばなかった人も、大学で学び、他者と出会い、経験を積んでいく中で、いつしか自分のタラントンが見出されることがあるはずです。またタラントンというものは、ひとつであるとは限りません。いま「自分のタラントンはこれだ」というのがある人にも、さらなるタラントンが見出されることがあるでしょう。また経験や年齢を重ねる中で、新しいタラントンに気づかされるということもあるはずです。

自らに与えられたものが何であるかを見つけること。そしてそれを伸ばし育て、となりびとのために用いること。そのような促しを、わたしたちはこのタラントンのたとえから聞き取りたいのです。

〈梅花女子大学・大学院卒業礼拝〉

「Calling」

日本基督教団大阪教会 牧師　本庄 侑子

みなさんの大学での学び、またさまざまな出会いの中には、自らに与えられたタラントンに気づき、伸ばし、用いていくためのチャンスがあるでしょう。ここに集まったひとりひとりが、「忠実な良い僕」として、自らに与えられたタラントンを見つけ、育て、それをとなりびとのために豊かに用いるものへと成長していくことができるよう、願う次第です。

旧約聖書出エジプト記3章1～6節

皆さん、ご卒業おめでとうございます。梅花女子大学、大学院での学びを終えて、新たな門出に立たれるお一人お一人の上に、神様の祝福をお祈りします。

皆さんは、どんな思いで今日を迎えているでしょうか？夢に向かって大きく前進し、期待に胸を膨らませている方もいれば、願い通りの進路に進めず、晴れやかでない思いの方もいらっしゃるかもしれません。しかし、それは今日だけではないでしょう。これからも、想像以上の大飛躍を遂げることもあれば、今は想像もできないような大きな挫折を経験するかもしれません。しかし、どのような時も決してなくならないものがあります。今日はそのことをお伝えすることでお祝いの言葉としたいと思います。

「召命」という言葉を聞いたことがあるでしょうか？　英語では「Calling」がそれにあたります。「名前を呼ぶ、電話をかける、目を覚ませる」という意味の言葉です。「召命」を大胆に言い換えるならば、「神様からの呼びかけ、神様からの着信、神様からの目覚まし時計」です。この世界には、神様からの「召命」がある。そう知らされて、神様からの呼びかけを聞き、受話器から聞こえる声を聞き、目を覚まさせられて生きてきた人たちがいます。

今日はその中の一人、モーセをご紹介します。「召命」は、モーセが羊飼いとして生きていた荒れ野で起こりました。いつものように羊の群れを追っていたモーセは、燃えているのに燃え尽きない柴を目にします。「どうしてあの柴は燃え尽きないのだろう」。モーセは、不思議な光景に引き込まれるようにして、道をそれて見に行きます。神様は、そんなモーセの姿をご覧になり、柴の間から声をかけられます。「モーセよ、モーセよ」。

モーセを呼び出す神様からの声。それは、モーセが日常の場所から遠く離れて、神様を捜し求めて見出した、という話ではありません。モーセの羊飼いとしての日常生活の中に、神様が仕掛けをし、先回りして待ち伏せをし、モーセの好奇心をも巻き込んで柴の前にまで導き、声をかけられたのです。皆さんは、梅花女子大学、あるいは大学院に入学し、今日まで学んでこられました。しかし、深い部分から見れば、皆さんの誰一人として、自分でこの場所を見出した人はいないのです。その背後では神様の仕掛けがあったのです。梅花女子大学には礼拝があります。礼拝のある大学に導かれたというのは重大なことです。「召命」は礼拝で起こるからです。皆さんは、梅花女子大学において神様に先回りして待ち伏せをされ、礼拝を通して名を呼ばれ、声をかけられてきたのです。

「主は、モーセが道をそれて見に来るのをご覧になった」（4節）。モーセをご覧になっていた神様は、皆さんのことも、ずっと見ておられました。梅花女子大学で学ぼうと思った時も、入学式の日も、それからの喜びの日も、深い挫折を味わった日も、人生の始まりから今日までの全てを。神様は先回りして、皆さんがここに来るまでの道のりを見つめながら梅花女子大学で待っておられ、皆さん一人一人を名指しで呼んでこられました。

「足から履物を脱ぎなさい」（5節）。神様はモーセに、そう告げられました。神様に呼びかけられたモーセは、それまで自分の歩みを続けてきた足を止め、履物を脱がざるを得なくなりました。履物を脱いだモーセに、神様はさらに語りかけられました。「わたしは、エジプトにいるわたしの民の苦しみをつぶさに見、追い使う者のゆえに叫ぶ彼らの叫び声を聞き、その痛みを知った。それゆえ、わたしは降って行き、エジプト人の手から彼らを救い出し、この国から、広々としたすばらしい土地、乳と蜜の流れる土地、…へ彼らを導き上る」（7節～8節）。

モーセの名前を呼ばれた神様は、遠く高い所に座り込んでおられる方ではありませんでした。地上にある苦しみ、人間の叫び、痛みに耳を傾け、天から降って救い出してくださる方でした。そして、そのために特

定の人間を選んで、用いる方でした。神様はこの時、モーセを選んで言われました。「今、行きなさい。わたしはあなたをファラオのもとに遣わす。わが民イスラエルの人々をエジプトから連れ出すのだ」(9節)。

モーセは動揺しました。モーセには複雑な過去がありました。イスラエル人ながらエジプトの王宮で育てられた、という過去です。かつて、モーセは同胞イスラエル人を救おうと情熱を抱いたことがありました。しかし、大失敗に終わりました。モーセはその時、逃げました。荒れ野に身を隠して第二の人生を始めました。あの日からもう40年もの年月が流れていました。このまま羊飼いとしての余生を平穏無事に過ごすとばかり思っていました。あの時の若さも情熱も残っていません。しかし、神様はそのモーセを選ばれました。エジプトからイスラエル人を導き出すには、イスラエル人でありながら、エジプトで育ったモーセが必要でした。しかし、それ以上に今のモーセが必要でした。自分自身から出る熱情に燃えたぎるモーセではなくて、それらに挫折し、燃え尽きて、神様から来る熱情に燃やされることでしか立つことができなくなったモーセをこそ、必要とされたからです。

抵抗するモーセに対して、神様は言われました。「わたしは必ずあなたと共にいる」(12節)。神様が共にいてくださる。それは、モーセがどこへ行くにもお供してくださって、秘書のように指示に従ってくださる、という意味ではありません。人々の叫びを聞き、その痛みを知り、声にならない祈りに応えるためにモーセを選んでくださった神様は、何があってもモーセを諦めず、神様のご計画に用い抜いてくださる、ということです。モーセはこの時、神様に選ばれたばかりに、波乱万丈の余生を送ることとなりました。しかし、もう燃え尽きることはありませんでした。その命を、人々の救いという尊い目的のために最後まで燃やし尽くしました。挫折したら燃え尽きてしまうような自分自身から出た熱情ではなく、何があっても決して燃え尽きることのない神様の熱情がモーセを燃やし、立たせ続けたからです。そう、あの日に見た燃え尽きない柴は、このことのためにモーセを用い抜くという神様の熱情だったのです。

私も「Calling」を聞いてきた一人です。それはたった一回きりの出来事ではなく、礼拝ごとに起こってきた出来事です。皆さんと同じように大学を卒業した頃は、今のような自分の姿は全く想像もしていませんでした。あの時に抱いていた夢自体にはことごとく挫折してしまいました。未来が見えず、暗い日々も長く過ごしました。しかし不思議です。それらの夢を抱かせた根本の思いは心の内に燃え続けていました。そして、それこそが「Calling」でした。今思えば、かつて抱いていた夢は、人に羨ましがられたいとか、見返してやりたいとか、自分から出た余計な思いが入り混じっていました。神様は、挫折という一見喜ばしくない出来事を通らせて、それら余計な思いを脱がせ、あるいは燃やし尽くしてくださいました。そして、礼拝ごとに名前を呼び直してくださり、神様から出る熱情で捉え直し続けてくださいました。そうして導かれたのが牧師という道でした。今も、余計な思いが入り混じっては挫折をしますが、燃え尽きない神様の熱情によって、礼拝ごとに「Calling」に生かされ直しています。

梅花女子大学が耳にし、その教育を導いてきた「Calling」。それは、ただ皆さんの夢がかなうように、ということではありません。お金に困らず、いつも健康で、自分を好きでいてくれる友達に囲まれ、将来は良きパートナーや子どもに恵まれ、平穏な老後を過ごす。そういうことにあるのでもありません。もちろん、それらが与えられる人生は素晴らしいでしょう。しかし、梅花女子大学がその教育によって応えようとしてきた「Calling」は、もっともっと深く大きな所にあります。世界中の痛み、叫びを聞いておられる神様が、その祈りに応えんと動き出すために皆さんを梅花女子大学に導かれた、ということです。皆さんお一人お一人に、あなたを通してでしか実現できない神様の熱情が燃えている、ということです。かつて、イスラエルをエジプトから導き出すという特別な使命のために、神様はエジプト育ちのイスラエル人モーセを選ばれました。神様は今、あなたを通してでしか果たせない特別なご計画を携えて、あなたの名前を呼んでおられます。

この世界には、神様からの「Calling」があります。皆さんは、すでに聞いてこられたはずです。これからも聞き続けて歩んでください。卒業後も礼拝は続きます。これからも世界中の教会で開かれています。ぜひ、事あるごとに礼拝に帰ってきてください。そして「Calling」を聞き直してください。梅花女子大学が心血を注いで皆さんに手渡した知識、経験を生かして、その命を神様に用いていただいてください。神様が、皆さんを呼んでおられます。柴が燃えています。皆さんに向かって燃えています。「Calling」に生きる人生は、本当に意義深い、豊かな人生です。ご卒業おめでとうございます！

日本基督教団大阪教会

学園クリスマス標語

—2018年度　クリスマス標語—

「心ひとつにクリスマス」学生会館前

アドベント音楽礼拝

2018年12月10日(月)　澤山記念ホール

アドベント点灯式

2018年11月29日(木)　学生会館前

クリスマスイブニング2018　クリスマス礼拝

2018年12月15日(土)　澤山記念館 礼拝堂

梅花女子大学　クリスマス礼拝

2018年12月17日(月)　澤山記念ホール

Merry Christmas

「アンネの薔薇育成ボランティアを募集しています」

日本文化創造学科3年生　由井　綾乃

私たちは「アンネの薔薇」を中心に学内の薔薇を育成しています。私たちの育てる薔薇はF棟前と図書館前の花壇、宗教部の鉢植えに植栽されています。土壌作りから剪定まで、丹念に手入れをすることで美しい薔薇の植栽を目指しています。また、薔薇の育成だけでなく、枯れた薔薇の花弁や葉を乾燥させてできるポプリという芳香剤も作っています。美しく咲いたあとにも香りを楽しむという考え方はとても素敵で、ポプリ作りを通して役目が終わったらすぐに捨ててしまうこれまでの自分の考えを改めようと思いました。

リーダーの食文化学科3年生の花田望沙さんは、2016年の4月から活動しており、初めは全く咲いていなかったものの手入れを始めてから少しずつ薔薇が咲くようになり、自分で育てるということの楽しさと達成感を味わったそうです。また、花田さんはいつもピンクや黄色など、薔薇の彩やかな色に心が癒されていると仰っています。

私は元々薔薇などの花が好きでこのボランティアに参加したのですが、自分たちで世話し薔薇の蕾が花開いた時は嬉しさで心が弾み、以前よりもっと花が好きになりました。2018年からはメンバーも増え、薔薇を通して学年や学科を超えた繋がりが生まれました。メンバーが増えたので、現在はメンバーと相談し、メンバーの都合が合う曜日に活動を行っています。

薔薇育成ボランティアでは、メンバーを募集しています。花を育てたい人なら、学年や知識の有無関係なく大歓迎です。学業やアルバイト、サークル活動などで忙しい毎日の中、週に一度ですが花と向き合いゆったりとした時間を過ごしてみるのはいかがですか？

（知能に重い障がいを持つ方々の施設）～止揚学園を訪問して～

「与えるのではなくもらうということ」

看護学科1年生　松田　美咲・森田　美桜

障がいを持っている方が住んでいる学園と聞いてどんなところだろうと思っていたが、実際訪問すると明るくてとても暖かい場所だと感じた。例えば、学園のいたるところに自分たちが描いた絵があり、お風呂場は琵琶湖を意識した絵が描いてありとてもカラフルだった。また学園に高い塀や門がなく近所の方や誰でも気軽に入れるようにしていて、近所の方とのかかわりをとても大切にされていた。学園に住んでいる人たちはいつも笑顔で気さくに話しかけてくださった。会話をすることは難しかったが、私が話しているとうなずいたり身振り手振りで答えてくださっていたり、言葉はなくても相手に伝わるし言葉以外のコミュニケーションもとても大切だと感じた。

（松田美咲）

駅から15分ほど歩くと自然に囲まれた場所に立っている、遠くから見てもわかるほど色鮮やかに塗られた建物があった。障がい者の方たちと支える人たちが一緒に住んでいるという話だけ聞くと、病院の施設のように思われる（私も実際に思っていた）が、実際にはお年寄りの方から小さな子どもまでがひとつの「家族」となって住んでおられた。訪ねた日は一人の障がいの方が誕生日だった。お母さんから届けられた特大ケーキを見て周りの人に「ケーキ、ケーキ！」ととても嬉しそうに仰っている姿と、周りの方たちがそれを笑顔で聞いている姿が印象的だった。障がい者というレッテルに関係なく同じ空間で喜びを共有している家族たち、障がい者だからといって支えている人が与えているということはなく逆に思いをもらっていた。私たちはそのような場所を訪れ色々な思いをもらった。「またね」という約束を交わして。

（森田美桜）

〈小梅祭　学生礼拝〉

「人をパンに例えると」

食文化学科1年生　吉原　更紗

私は、キリスト教において「パン」という食べ物は、どのような人でも身近にあるごく普通の食べ物であると同時に、他のどの食べ物よりも特別な物のように感じます。

聖書の中では様々なたとえ話が記されていますが、その中でも「パン」や「種」が出てくるたとえ話は多くあります。それは、その時代の人たちにとって、パンが日本人のお米くらい身近な食べ物であったからだと思われます。

また、現代にもパンのたとえ話やことわざなどは多数あります。例えば、スペインには「あなたとならばパンと玉ねぎ」というプロポーズの言葉があります。これは、あなたと一緒にいられるなら、パンと玉ねぎだけの貧乏な暮らしでもかまわない、という意味だそうです。他にも、十分に長生きした人は「自分のために焼かれたパンの半分以上を食べてしまった」というたとえ話があります。

しかしこのように日常に溶け込んだ食べ物であると同時に、パンは神や人の体と同一視されており、あの世とこの世を結ぶもの、「生けるパン」と記されています。それほどまでにパンが神聖なものだと物語っています。

私はこのパンという慣れ親しまれた神聖な食べ物を、人に当てはめてみようと思いました。

そもそもパン作りは、材料である小麦から生地を焼き上げるまでにいくつかの工程があります。この工程をすべて終えて、食べられる状態がキリスト教でいう「体」です。この体が出来上がるのは、人でいうとどのあたりになるのかを考えたとき、私はちょうど大学生あたりが当てはまる時期だと思いました。

では、焼き上げられたパンとしての私たちは、どのように過ごすべきでしょうか。そこで私は隣人愛が思い浮かびました。

マタイによる福音書22章34節から40節では、律法の中で最も重要な第一の掟は、「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。」というものです。そして、これと同じように重要である第二の掟は、「隣人を自分のように愛しなさい。」という掟です。つまり、キリスト教では隣人を愛することは、とても重要なことなのです。

誰かと何かを共有することと、人をパンに例えることは似ていると私は思います。聖書でのパンの役割は、食べるということだけではなく、共有するということではないでしょうか。隣人にすべてを分け与えるのではなく、自分の持っているパンを裂いて分ける。この行動は、相手と同じものを共有し、対等な関係を結ぶことと繋がるのではないでしょうか。

「自分のために焼かれたパンの半分以上を食べてしまった」という言葉ですが、この例えも人生をパンに当てはめて考えていると思われます。この場合、残りのパンが半分以下になってしまいもう残り少ない、という例えとして使われています。その残されたパンをさらに裂いて隣人に分けると、その人のパンが一気になくなってしまうように感じます。ですが、お互いに愛すべき隣人として接することができたならば、その人が裂いて分けた分だけ、相手も分けてくれるはずです。

自分の利益を考えて行動するということは、現代を生きる上で必要ないことだとは言えません。周りに心配をかけないために、自立できるように利益を確保することも、とても重要で難しいことです。ですが、自分のことだけを考えて行動することは視野も狭くなり、本来の目的も見えなくなってしまうかもしれません。

そんな時、もし相手からパンを差し出されたら、自分のパンを意識してみてください。相手と比較するということではなく、もしその人のパンが自分にとって喜ばしいものであった時、自然と自分も相手に喜んでもらえるパンを返したいと思うはずです。

必ずしも、質の良い人生が質の良いパンだとは限りません。自分の意識をほんの少し相手に向け、合わせることで、その人にとって嬉しいパンになれるはずです。その隣人にとって特別なパンを、その人と共に共有しましょう。

（心臓病児共同保育園）～パンダ園のクリスマス会に参加して～

「クリスマスの素敵な時間」

こども学科4年生　木村 友衣佳

12月25日クリスマス当日、私は京都にある「心臓病児共同保育園パンダ園」のクリスマス会に参加しました。少しの不安とワクワクを胸に京都に向かいました。

クリスマス会の会場では、子どもたちは待ちきれず駆け回っていたり、話で盛り上がっていたりとにぎやかな雰囲気でした。その光景に、本当にあの小さな体に大きな病気が潜んでいるの？とその元気さに圧倒されて驚いてしまいました。クリスマス会では、子どもたちと他愛のない会話をしながら被災時でも作れるというカップケーキを作ったりして、その後でみんなと美味しい食事をしました。パンダ園は私に大好きな絵本を読んで簡単なブックトークをする時間を与えてくださいました。これまでにも何度かそういう機会は与えられてきたのですが、保育園という幅広い年齢層での1人のおはなし会といのは初めての経験で不安でいっぱいでした。最初はどうなる事かと思いながら、いつも通りに始めて見ると、次第に子どもたちは絵本の世界に入り込んできてくれて、真剣に聞いてくれました。仕掛け絵本ではページをめくるごと目をキラキラと輝かせ、読んでいて私までワクワクしました。

その後は、他の大学の先生による紙芝居を聞きました。私は今回のクリスマス会の参加により、「心臓病児の子ども達」「パンダ園」、「絵本のすばらしさ」について知る事ができました。そして、子ども達から生きる活力や笑顔をたくさんもらいました。今回このような機会をくださったパンダ園の皆様本当にありがとうございました。

2018年（平成30年）度 献金及び献品報告

いつも宗教部の諸活動にご協力頂きましてありがとうございます。今年は下記の東日本大震災等の被災地・施設・団体に、集めた献金・献品を送付いたしました。ご協力いただきました皆様に心より感謝し、ご報告申しあげます。

《献金送付先》

＊前期献金＊

・「平成30年大阪府北部地震災害義援金」（りそな銀行大阪公部を通して被災地に送金）	15,000円
・平成30年7月豪雨災害義援金（兵庫教区被災者生活支援：長田センターを通して被災地に送金）	30,000円
・東日本大震災の義援金（被災地支援・エマオを通して被災地に送金）	20,000円
・パンダ園（心臓疾患をもつこどもたちの保育園）	10,000円
・止揚学園（知能に障がいをもつ方々の施設）	10,000円
・救世軍希望館（児童養護施設）	10,000円
・大阪水上隣保館（社会福祉施設）	5,000円
・レバノンホーム（児童養護施設）	10,000円
・振込手数料（郵便局）	480円
合　計	110,480円

＊後期 クリスマス献金＊

・東日本大震災の被災地	10,000円
・平成30年7月豪雨災害義援金	10,000円
・パンダ園	10,000円
・止揚学園	10,000円
・救世軍希望館	10,000円
・釜ヶ崎医療連絡者会議（路上生活者支援団体）（送金予定）	10,000円
・レバノンホーム	10,000円
・振込手数料（郵便局）	400円
合　計	70,400円
総合計	180,880円

《 献　品 》 救世軍希望館へ持参 ※炊き出し用として

【食　品】　米 53kg

【日用品】　タオル 1枚、ミトン・鍋敷 1セット、ぬいぐるみ 3個、タペストリー 1枚　※どんぐり山フェスタのバザー用品

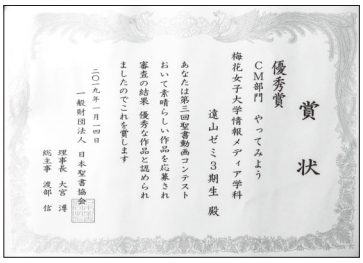
日本キリスト教海外医療協力へ郵送

【海外国内切手、コインと紙幣】　約1kg444g、約373g　以上

第3回聖書動画コンテスト2018

CM部門優秀賞「やってみよう」篇が受賞

日本聖書協会主催の聖書から着想を得た動画作成のアイデアや技術を競う「第3回聖書動画コンテスト・アワード」が1月14日（月・祝日）、ユナイテッド・シネマ豊洲（東京都江東区）で行なわれた。48の応募作品の中からノミネートされた20作品が上映され、最優秀賞や作品賞が選ばれた。本学情報メディア学科遠山耕二ゼミ（代表者 情報メディア学科4年生三浦果純さん、南汀紗さん）の「やってみよう」篇がCM部門で優秀賞を受賞した。



賞状

優秀賞　CM部門　やってみよう

梅花女子大学情報メディア学科

遠山ゼミ3期生　殿

あなたは第三回聖書動画コンテストにおいて素晴らしい作品を応募され審査の結果、優秀な作品と認められましたのでこれを賞します

二〇一九年一月一四日

一般財団法人　日本聖書協会

理事長　大宮　溥

総主事　渡部　信

宗教部一年の歩み

宗教部はチャペル・アワー(礼拝)を守ることに重点をおいた一年だった。チャペル・アワーは学園の建学の精神を伝える重要な役割を担っている。宗教部は、心に残るメッセージを伝えることに全力を注いだ。

4月 聖書を読み祈る「オリーブのつどい」

4月11日(水)より、毎週講義期間中の水曜日と木曜日に教職員と学生のための「オリーブのつどい」をお昼休みに宗教部事務室で開催した。聖書を皆で輪読し、祈りの時間を持った。

竹の子掘りと販売

竹の子掘りのボランティアを募り、学内で販売した。売上金は12、500円になった。前期献金に充当する。

6月 青梅の収穫と販売

今年も、学内で実った青梅を有志の教職員・学生ボランティアで収穫し販売した。毎年、5月末～6月中旬辺りの適当な時期に収穫し販売しているが、今年は6月上旬に収穫した。売上金の28、705円は、前期献金に充当した。

薔薇育成ボランティア募集

F棟と図書館前(坂の登り口左側)に植えてあるアンネの薔薇の育成ボランティアの学生を募集した。毎週水曜日の2講時に宗教部に集合し、植栽の手入れをして美しく薔薇を咲かせたり、またこの薔薇の花弁を用いてポプリを作ったりと、「アンネの薔薇」を中心とした繋がりの輪を広げて行きたい。

7月 教職員研修会・建学の精神プログラム

7月4日(水)午後4時20分からF棟702教室で本学園長の近藤十郎先生を講師として教職員研修会・建学の精神プログラム「梅花140年 ～創設期の人々の祈りを引き継ぐために～」と題してご講演頂いた。

8月 「夏のつどい2018」の開催

8月30日(木)に「夏のつどい2018」を午前10時45分から午後2時40分まで行なった。12時30分から午後1時30分まで礼拝堂でサマー・チャペル・アワーを行なった。講師は日本基督教団西宮教会副牧師、梅花中学・高等学校聖書科非常勤講師の石田求先生をお招きして「支え手はいつもそばに」と題して奨励して頂いた。学生・教職員の聖歌隊が「シャロンの花」を合唱した。サマー・チャペル・アワー後に南側ロビーで茶話会を行なった。

9月 「止揚学園」訪問

今年は、9月3日(月)に、教職員・学生の合計8名で訪問した。お昼に賛美歌を皆で合唱した。

11月 小梅祭「学生礼拝」

11月22日(木)午前11時より「学生礼拝」を礼拝堂で行った。奨励は「人をパンに例えると」と題して、食文化学科1年生の吉原更紗さんが担当した。司会は日本文化創造学科1年生の冨田桜さん。奏楽は水間泉先生。聖歌隊による讃美歌486番「飢えている人と」の合唱があった。

アドベント点灯式

11月29日(木)午後5時50分から6時20分迄、学生会館前で第一部のアドベント点灯式を行った。こども学科4年生の松永七海さんのキーボードによる前奏で点灯式は始まった。学園宗教主事の髙田太先生の聖書朗読の後に学長・宗教部長の長澤修一先生に点灯して頂いた。聖歌隊の皆さんによる「もみの木」の合唱があった。第一部の点灯式終了後、第二部の点灯式を澤山記念館一階北側ロビーで行った。みんなでクリスマスソングを歌った。その後、南側ロビーで懇親会を行った。

12月 大学 アドベント音楽礼拝

12月10日(月)午後1時よりアドベント音楽礼拝を澤山記念ホールで行った。日本基督教団能登川教会牧師の谷香澄先生より「クリスマスは誰のために?」と題して奨励があった。植田奈津子、植田加奈子の姉妹が歌唱とピアノ演奏を担当された。講師と演奏者の3名は、梅花中学・高等学校の同窓生。

クリスマスイブニング2018 クリスマス礼拝

12月15日(土)にクリスマスイブニング2018が開催された。午後2時30分から午後3時30分まで礼拝堂で、クリスマス礼拝を行った。奏楽は水間泉先生。早稲田摂陵高等学校ウィンドバンドのアンサンブル演奏の後、日本基督教団浪花教会牧師の山口恒先生より「心ひとつにクリスマス」と題して奨励があった。

学園創立141周年 記念礼拝 及び 澤山保羅先生墓前祈祷会

2019年1月18日(金)

学園創立141周年記念礼拝
澤山記念館礼拝堂

澤山保羅先生墓前祈祷会
大阪市設南霊園

大学　クリスマス礼拝

12月17日(月)午後1時より大学のクリスマス礼拝を澤山記念ホールで行った。奏楽は水間泉先生。司会は髙田太先生。キャンドル点灯は日本文化創造学科1年生の大野愛奈さん、大村咲さん、松山愛実さんの3名が担当した。聖書朗読はこども学科4年生の木村友衣佳さんが担当した。日本基督教団天満教会牧師の春名康範先生より「クリスマスは希望のシンボル」と題して説教があった。受付は日本文化創造学科1年生の福井佳奈女さんが担当した。

パンダ園のクリスマス会訪問

12月25日(火)京都市左京区にある心臓病児共同保育園パンダ園のクリスマス会に学生・教職員の5名で参加した。

1月 創立141周年記念礼拝

1月18日(金)午前10時から礼拝堂で創立141周年記念礼拝が開催された。学園宗教主事の髙田太先生より「パウロと保羅」と題して奨励があった。その後、12時30分から大阪市設南霊園に移動し、澤山保羅先生墓前祈祷会を行なった。学園長の近藤十郎先生より「校祖澤山保羅の祈りを引き継ぐために」と題して奨励があった。参加者は、30名。

3月 卒業礼拝

大学・大学院の卒業礼拝を3月14日(木)午前9時15分より、澤山記念ホールで開催する。「Calling」と題して日本基督教団大阪教会牧師の本庄侑子先生から説教を頂いた後、学生・教職員の特別聖歌隊リトル・ハーモニーオリーブの皆さんによる合唱「旅立ちの日に」がある予定。

2018年度 チャペル・アワー感想文より

「チャペル・アワーへようこそ」
本学学園宗教主事　髙田　太先生

キリスト教というのは今まで何度も聞いたことがあったのですが、礼拝の仕組みや意味などは初めて知りました。キリスト教に対して初心者の人へ向けた噛み砕いた説明のおかげで少し分かるようになりました。尊敬と愛のバランスがとても難しいと思ったことがあったので、聖書に書いてある尊敬や愛について読んでみたいと思いました。

「隠された宝～自己発見への旅立ち～」
本学学園長　近藤十郎先生

大学生活4年間は宝探しでありそれは自分探しをすること。日々の日常を刺激的なものにするために毎日を宝探しのように生きることは人生の中でとても大切なことだと思いました。自分の人生で本当に必要なものが見つかると価値観が180度逆転してしまうような出会いを体験してみたいです。

「澤山保羅先生の思い」
本学名誉教授　茂　義樹先生

自分の好きな人だけでなく、自分が嫌っている人や自分のことを嫌っている人への積極的な愛。それがイエスの愛なんだ。というお言葉が印象的でした。今まで私は好きな人も苦手な人も分け隔てなく接するよう心がけていました。その心がけは間違っていなかったのだと再確認できました。今回のチャペル・アワーで澤山保羅先生や梅花女学校の創立についてよく分かりました。イエス様や澤山先生が説かれた〝積極的な愛〟を今後も胸において日々成長していきたいと思いました。

「わたしの賜物、みーつけた」
日本基督教団高槻日吉台教会
牧師　小笠原純先生

人それぞれに与えてくださった賜物を大切にして生きていこうと思いました。そして、自分のためだけでなく皆のために生きようと思いました。これからの4年の学びで探していきたいと思います。

「病気や障がいをもつ子どもたちから もたらされる「愛と力」」
パンダ園保育士　佐原良子先生

今日の礼拝は病気の子供たちの事についてパンダ園の先生がお話してくださいました。病気をもって生まれてきた子たちは、最初から病気で何も悪いことをしていないのにかわいそうだなぁと思っていました。しかし、今日佐原先生が読んでくださった絵本で、「がんばるこころをありがとう」と書いておられて病気をのりこえた子供たちは、普通の人より強い心をもてるし、意味のあることなのかなと思いました。私は将来、養護教諭になりたいと思っているので、今日きいたことを参考にして病気の子たちを支えて行きたいと思いました。

「人は変われる。一緒なら。」
日本基督教団千里聖愛教会
牧師　川江友二先生

人は自分が正しいという考えがあるけれど、それは人それぞれみんなにあることで話し合ってみることや接することで考えが変わったり、お互いに同じ考え方になり一緒に生きていくことができるということを知ることができました。

「何になるか」ではなく、「何のためにそれになるのか」
日本基督教団淀川教会 牧師　川合　望先生

〝人は色んな人に支えてもらいながら生きている〟ことについて改めて考えさせられました。自分を支えてくれる人が、家族でも友達でも恋人でも、その人が居るから頑張れると思えることが、どれだけ幸せかと思いました。そして、その人は必ず自分にとって大切であり、大切にしなければならない人だと思います。また、改めて、〝何のために歯科衛生士になるのか〟あるいは〝どこを目指すのか〟を自分としっかり向き合って、その答えを考えようと思います。

「神様のなさること」
本学心理学科教授　後藤智子先生

東日本大震災で傷ついた子たちは今でもやっぱり心に傷を負っているんだなと思い、わたしも将来カウンセラーになったらそういう方に寄りそえるようなそんな人になりたいです。

「命をいただくこと」
本学管理栄養学科教授　林有希子先生

〝いただきます〟という言葉には、その命に対しての感謝と、その命を私たちの元に運んできてくれたすべての人への感謝の気持ちを表していることを知り、いつも以上に〝いただきます〟という言葉に、重みを感じました。私は将来、管理栄養士になって、青年海外協力隊に入りたいと思っています。世界中の人々に食べることの大切さ、命を〝いただくこと〟を伝えていきたいです。

「愛してはいけない」
日本基督教団神戸雲内教会
牧師　床次隆志先生

床次隆志先生は言葉では簡単に愛すると言えるが行動にすることはとても難しいと考えているとおっしゃいました。愛の他にも言葉にするのは簡単だけど行動するのは難しいことが多くあります。言葉にするのも行動するのと同じぐらい難しく考えないといけないと考えさせられました。

「今を生きる」
止揚学園園長　福井　生先生

人には一人一人に人権があり、人の手をかりて生活していかなければならないとしても周りの人が助けて生きていくべきだと思いました。自分が普段していることが普通にできないという人にとっては、できた時に喜びを感じるということをあらためて知り、普段の何気なくしていることが普通にできるということに感謝して生きていこうと思いました。

「飛べない鳥は」
日本基督教団石橋教会 牧師　仲程愛美先生

人間は虚しい生き物だなと思いました。「飛べない鳥は走れる・泳げる・歌える」で金子みすずの「私と小鳥と鈴と」を思い出しました。結局命あるもの全て共存し、「みんな違ってみんないい」ということを〝善〟として押しつけたいんだなと人間の無常を感じました。抑揚のついた分かりやすい内容で、堂々としていて、私もあのように発表できるようになりたいなと思いました。

「落ちこぼれ」
日本基督教団阿倍野教会
牧師　山下壮起先生

種に例えた話はわかりやすく聞きやすかったです。一人一人が気持ちよく生きることのできる、差別のない世界になってほしい。

「あなたは何者ですか」
日本基督教団兵庫教会 牧師　涌井　徹先生

今日のお話を聞いて、確かに自画像を描くことは自分を客観視して見つめ直すことに適しているなと思いました。色々な身近にあるものを例えにお話をして下さったので、とてもわかりやすく感じました。

「この時のためにこそ」
日本基督教団大阪教会 牧師　本庄侑子先生

今、つとめている教会の先生が本庄先生一人しかいないということにもかかわらず、神様の声を聞きながら頑張っていらっしゃるということがとても素晴らしいことだと思いました。

「今日を大切に」
同志社大学神学部教授 水谷　誠先生

今日の聖書箇所は私の好きな箇所でした。旧約聖書の方は、私の母校で大切にされている所です。「主を畏れることは知恵の初め」という言葉はチャペルに英語で刻まれていました。新約聖書の方も何度か聞いたことがありました。この言葉を読んだ時、明日のことばかり考えていた自分に気づきました。今日という日はもう二度と返ってこないので、一日一日を後悔しないように生きて行きたいと思いました。

「伝えたいこと」
本学情報メディア学科教授　好田由佳先生

「あなたの選んだ道があなたの正解！」「覚悟を決めたら突き進め！」大学に入る前に進学するか否かで悩んだ事がありました。安定した会社勤めから学生に戻った時は「いばらの道」を選択した自分を嘆いた事もありました。独りぼっちで寂しいと思った。でもそうじゃなかった。そう思える今です。

「相手の気持ちを理解する」
本学管理栄養学科教授　藤田修三先生

大学で学ぶことにおいて人生の理想を見つけることが大切だという先生のお言葉が今回一番心に残りました。実際にそれを実現することは難しいけれど、頑張ってみようと思いました。

「神さまは見てはるで～」
児童養護施設レバノンホーム 理事長
日本基督教団池田五月山教会 牧師
有澤慎一先生

人の前だけで良い行いをするのはだめだと思った。人に褒められるためになにかをするのではなく、影でも良い行いをできるようになりたいと思った。偽善者にならないようにしたいと思った。人に評価されるために行動しているような気がするので、そこを気にせず、行動したい。

「悪魔はどこにいる?」
梅花中学・高等学校聖書科非常勤講師
甲斐洋子先生

人は天使のような風にも、悪魔のような風にもかわると思うとこわいと思いました。両方に触れることはあると思います。悪い方に行かないように自分の心をはっきりさせておきたいです。

「忠実な僕」
日本基督教団仁川教会 牧師　杉田俊介先生

与えられた才能や能力を他人の為に用いることが大切だということが分かりました。自分も他人が困っている人の為に生かせるようになりたいです。

「求めよ、そうすれば好き同士になれるかも」
日本基督教団茨木春日丘教会
牧師　大石健一先生

恋愛とか、身近な例を用いてすごく聞きやすかったです。そして聞いていて楽しく話に引き込まれました。

「弱さの中でこそ」
日本基督教団神戸多聞教会
牧師　近藤　誠先生

今日の聖書箇所を読んで中学の時「誇ることがあるなら自分の弱さを誇りましょう」というような年間聖句があったことを思い出しました。6年間何気に受けてきた礼拝が自分の中に残っているんだと気づきました。〝弱さ〟というとても弱いものに聞こえるけれど、その弱さを乗り越えていくことで人は強くなれるのかなと思いました。

「贈り物」
日本基督教団京都さふらん教会
牧師　稲野琢也先生

クリスマスに関して新しい知識が入り、クリスチャンにとってクリスマスというイベントの大切さがより分かった。自分が欲しいプレゼントでなくても思いやりの気持ちや喜びの気持ちをみんなと分かち合えるような人になれるようにがんばります。

アドベント音楽礼拝
「クリスマスは誰のために?」
日本基督教団能登川教会 牧師　谷　香澄先生

梅花中学2年生の時に今は無い行事ですがクリスマス・ページェントという行事の中で聖歌隊として「Ave Maria」を合唱しました。今日は久しぶりに聴けて嬉しかったです。キリスト教のイベントの中でもクリスマスはやはり特別だなあと思いました。

クリスマス礼拝
「クリスマスは希望のシンボル」
日本基督教団天満教会 牧師　春名康範先生

「18歳と81歳の違い」をTLで拝見したことがあったのですが、再度聴くと人間の儚さが滑稽で思わず苦笑いで聴いていました。〝常識（＝社会通念）〟を壊して社会的立場の弱い者に目を向けるという本質は現代社会においても大切だと思いました。

「パンのように生きよ!」
日本基督教団希望ケ丘教会
牧師　遠藤勇司先生

人のために何かをできるような人になりたいと思った。貴重な話しを聞くことができてよかったです。

「主よ、誰もいないのです」
日本基督教団大阪暁明館病院伝道所
牧師　岸本光子先生

久しぶりに聞いた聖書の箇所でした。奨励題を見てどういう意味だろうと思っていましたが、お話をきいてお話をして下さった先生がなぜこの題にしたかわかりました。私は悩みがあるとき、友人や家族に相談します。そんな悩みをきいてくれる友人や家族に感謝して私自身も一人で悩みをかかえている人に手をさしのべれるような人になりたいと思いました。

「泣く時、笑う時」
日本基督教団大住世光教会
牧師　岸本兵一先生

ウクレレの音が凄く良くて、もっと聞いていたいなと思いました。今、熟年離婚が増えているなか、夫婦仲が良いのは良いなと思いました。先生の話は面白くてもう少し聞いてみたいなと思いました。

「夢に向かって努力しよう!!」
本学名誉教授、本学チアリーディング部顧問
三浦恵子先生

チアリーディング部がどのようにして創設したかなど梅花の歴史をたくさん聞けて、自分自身も夢に向かってもっと努力して今の環境に感謝して頑張りたいです。三浦先生のお話しを聞いてチアリーディング部の一員として日本一に向かって努力することはとても大切だと思いました。

2018（平成30）年度　チャペル・アワー講師一覧

（敬称略）

月	日	奨　励　題	略　　歴	奨励者
4	9	チャペル・アワーへようこそ	本学学園宗教主事	髙田　太
	16	隠された宝～自己発見への旅立ち～	本学学園長	近藤　十郎
	23	澤山保羅先生の思い	本学名誉教授	茂　義樹
5	7	わたしの賜物、み一つけた	日本基督教団高槻日吉台教会牧師	小笠原　純
	14	病気や障がいをもつ子どもたちから もたらされる「愛と力」	パンダ園保育士	佐原　良子
	21	人は変われる。一緒なら。	日本基督教団千里聖愛教会牧師	川江　友二
	28	「何になるか」ではなく、 「何のためにそれになるのか」	日本基督教団淀川教会牧師	川合　望
6	4	神様のなさること	本学心理学科教授	後藤　智子
	11	命をいただくこと	本学食文化学部長、本学管理栄養学科教授	林　有希子
	25	愛してはいけない	日本基督教団神戸雲内教会牧師	床次　隆志
7	2	今を生きる	止揚学園園長	福井　生
	9	飛べない鳥は	日本基督教団石橋教会牧師	仲程　愛美
	23	落ちこぼれ	日本基督教団阿倍野教会	山下　壮起
	30	あなたは何者ですか	日本基督教団兵庫教会牧師	涌井　徹
8	6	この時のためにこそ	日本基督教団大阪教会牧師	本庄　侑子
10	1	今日を大切に	同志社大学神学部教授	水谷　誠
	15	伝えたいこと	本学情報メディア学科教授	好田　由佳
	22	相手の気持ちを理解する	本学管理栄養学科長、本学管理栄養学科教授	藤田　修三
	29	神さまは見てはるで～	児童養護施設レバノンホーム理事長 日本基督教団池田五月山教会牧師	有澤　慎一
11	5	悪魔はどこにいる？	梅花中学・高等学校聖書科非常勤講師	甲斐　洋子
	12	忠実な僕	日本基督教団仁川教会牧師 神戸女学院大学非常勤講師	杉田　俊介
	19	求めよ、そうすれば好き同士に なれるかも	日本基督教団茨木春日丘教会牧師 関西学院大学非常勤講師	大石　健一
	26	弱さの中でこそ	日本基督教団神戸多聞教会牧師 梅花中学・高等学校聖書科非常勤講師	近藤　誠
12	3	贈り物	日本基督教団京都さふらん教会牧師 梅花中学・高等学校聖書科非常勤講師	稲野　琢也
	10	クリスマスは誰のために？	日本基督教団能登川教会牧師	谷　香澄
	17	クリスマスは希望のシンボル	日本基督教団天満教会牧師	春名　康範
1	7	パンのように生きよ！	日本基督教団希望ケ丘教会牧師 梅花中学・高等学校聖書科非常勤講師	遠藤　勇司
	12	主よ、誰もいないのです	日本基督教団大阪暁明館病院伝道所牧師 梅花中学・高等学校聖書科非常勤講師	岸本　光子
	21	泣く時、笑う時	日本基督教団大住世光教会牧師	岸本　兵一
	28	夢に向かって努力しょう!!	本学名誉教授、本学チアリーディング部顧問	三浦　恵子

宗教部編集後記

今年も新しい扉が開き、２０１９年度が始まりました。

２０１８年度のチャペル・ニュース第15号の編集を終え、キャンパスを歩いていると紅白の梅の香りが静かに運ばれてきました。天からの贈り物のようにも感じられ、その恵みに感謝いたしました。

宗教部の一年の歩みも学生、教職員や学内関係者、同窓会や近隣教会の皆様に支えられ、その年輪はまたひとつ増し加えられました。

毎回、チャペル・アワーでは学生有志の聖歌隊が美しい歌声を届けてくれました。学生によるアンネの薔薇育成ボランティアのメンバーも増えて段々と活発になってまいりました。花たちも応答してくれているのでしょう。

今年度は梅花中学・高等学校聖書科非常勤講師の先生方をお招きし、「夏のつどい２０１８」を開催し、サマーチャペル・アワーを守り、交流の時が与えられましたことを感謝いたします。

来る5月18日（土）にはキリスト教学校教育同盟の関西地区協議会総会、また、11月30日（土）には第5回キリスト教看護教育推進会議が、茨木ガーデンキャンパスで開かれる予定です。

新しい年も一致団結して実り豊かな「主の年」にしたいと思います。（0）